

7月3日湖北地域 長浜きやんせ体操です

○7月3日(水)
「いつまでも元気で楽しく暮らすため」
会場は臨湖南会館(湖北勤労福祉会館)、長浜市で、湖北みみ市でのスタッフも参加できるよう一時半から開催しました。

○7月11日(水)
「いざめしを作ろう」
会場は虎姫まちづくりセンターにて、長浜市ボランティアセンターの浅田かず子氏に指導していただきました。「いざめしって何?」とお思いでしょう。「いざ」は何か起きた緊急のことです。非常時にご飯を工

いきいき情報教室 ～生活に役立つ知識を学ぼう～

今年度は7月、9月と長浜市で、湖北みみの里のスタッフも参加できるよう一時半から開催しました。

浜市健康推進課保健師の五坪裕子氏、横山みなみ氏に、介護予防についてお話をいただきました。参加者は5名でしたが、質問もはさみながら、工夫されたパワー・ポイントで、「よくわかった」と皆さんに満足していただきました。60分の講座の次に、「長浜きやんせ体操」をしました。

滋賀県立 聴覚障害者センタードより

— 95 号 —

発行日／令和元年10月10日
発行所／草津市大路2丁目11-33
TEL 077-561-6111
FAX 077-561-6133
HP <https://shigajou.or.jp>

夫して作る料理教室でした。大鍋に沸かしたお湯で炊き込みご飯、煮物、酢の物、サラダ、デザート、お味噌汁が出来上りました。男性陣もおそろおそろ調理に参加、本当に簡単な作ることができました。

いきいき情報教室は滋賀県内の聴覚障害者を対象にした日曜教室事業です。これからも地域の方々の生活に役立つ内容で開催していきます。

センター美化活動 ～すっきり！さっぱり！きれいになりました！～

恒例行事となつた、ろうあ協会高齢部のみなさんによる美化活動（草刈り作業）が、今年も8月5日（月）におこなわれました。

年々、暑さが厳しくなり、当日も朝から高い気温や、熱中症を心配していましたが、参加いただいた15人のみなさんは元気に作業をしてくださいました。

いつの間にか、壁に這うように伸びたツル、成長しそうに伸びたツル、成草、そしてなぜかセンターの裏側に毎年生えてくるドクダミ。うつそうとしていたセンター周りの草が見る見るきれいになってしまいます。あつとう間に草がなくなつて



いくので、茂みからバッタが慌てて飛び出し、虫たちも大移動。刈り取った草のごみ袋がどんどん増えて10袋以上になりました。

高齢部のみなさんと職員も一緒に作業ができ、達成感を得て、笑顔あふれる作業となりました。

高齢部のみなさん、本当にありがとうございました。



9月11日 料理教室

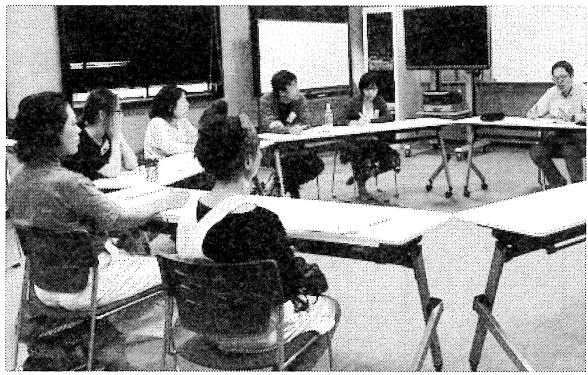
月21日(木)午前10時から愛荘町の福祉センター愛の郷で開催します。ぜひご参加ください。

次回は11月

聴覚障害児及び保護者サポート事業

保護者学習会のびのびサロン

「今年度は親子手話タイムを開始」



6月の学習会

これまで2回、6月29日（土）と7月20日（土）に開催。6月は「子どもの発達・健康な心とからだ」と題して、（社福）小鳩の家施設長の山田宗寛氏をお招きしました。山田氏は長年にわたる障害児との関わりから、子ども本来の成長を見る大きさをお話しいただきました。7月は滋賀県立小児医療保健センター耳鼻咽喉科の金沢佑治医師をお招きし、人工内耳は装着後も継続した支援が必要なことをお話しいただきました。新しい試みの、ろう講師3名による



7月の学習会

「親子手話タイム」も好評です。子どもが「わかる」ことを一番大切にできるよう、日常のちょっととしたやり取りから覚えられる講座を目指しています。「おいしいねー」「楽しいねー」などの気持ちが通じ合う家庭で、お子さんの安全基地になってほしいとの願いを込めて開催しています。

聴覚障害児の交流企画は9月15日の手話ふれあいフェスティバルでカフェを開きました。事前準備に3回の集まりを持ちました。今回の目玉は飲み物すべておやつ付き、そして手で淹れており、コーヒーの提供でした。当日は好天に恵まれ、当初の予想に反してアイスコーヒーが飛ぶように売れました。目の回る忙しさでしたが子どもたちも頑張って飲み物を準備し、お金のやりとりも正確にこなしました。支援してくれた大人たちも本当にお疲れ様の一日でした。

クローバークラブで手話フェスに参加



ジュースもばっちり



じっくり淹れるコーヒー



準備万端！余裕の表情

、意思疎通支援担当者
研修会に参加して、

去る7月24日(土)26日に全国手話研修センターと京都市聴覚言語障害センターで開催された「意思疎通支援担当者研修会」に参加しました。この研修会は、全国聴覚障害者情報提供施設協議会が主催するもので、聴覚障害者情報提供施設の手話通訳派遣・要約筆記派遣担当者が全国から集まり、講義と情報交換、演習など3日間集中で研修するものです。当施設を含む全国35施設から47名の担当者が集まりました。

1日目は株式会社プラスヴォイス代表取締役社長の三浦宏之氏による「民間企業における電話リレーサービス事業」についての講義のほか、長野県と熊本県から電話リレーサービス実施の現状報告がありました。

今まで電話文化が根付いていたなかつた聴覚障害者が電話リレーサービスを利用するようになると戸惑うことがあるのではと思います。事前に電話のマナーや利用方法を知つていただくことが大切だと感じました。

また、リレーサービスを実施することによって、ろう者のニーズや課題が分かることがある一方で、オペレーターの意識や技術の向上も必要であると思いました。電話「リレー」なので、内容をそのまま伝えなければ

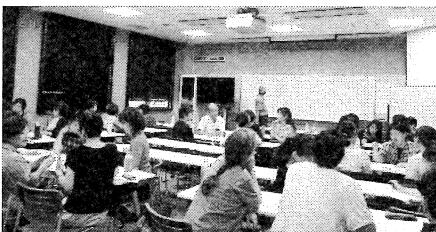
な場面では、オペレーターがどこまで支援していいのか判断に迷うときもあるとの説明に、経験を積んだオペレーターの必要性を感じました。

き姿とは」をテーマに、全国手話研修センター常務理事の小出新一氏による「情報提供施設の運営基準」についての講義がありました。聴覚障害者を雇用する公的機関での情報保障の現状、手話をめぐる環境の変化、情報提供施設の課題などの話がありました。

1日目は株式会社プラスヴォイス
代表取締役社長の三浦宏之氏による
「民間企業における電話リレーサービス
事業」についての講義のほか、長野県と
熊本県から電話リレーサービス実施の現状報告がありました。

3日目は、「個別支援とは」をテーマに、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官の宮澤典子氏による講義がありました。対面通訳では依頼者と利用者双方の様子を見ながら通訳できるのに対し、遠隔（リレー）通訳では、当たり前

意思疎通支援者研修会を開催しました



7月27日
（土）、聴覚障害者センターにて手話通訳者研修を開催しました。研修会には、手話通訳者37名が参加しました。講師には、一般社団法人日本手話通訳

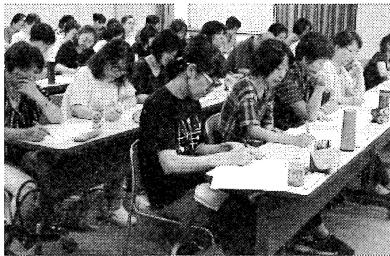
場面・労働場面・教育場面・手話講座の場面など、どれも手話通訳者が困難に直面しがちな場面を設定しました。川根氏曰く、「わいわい、ごちゃごちゃ話し合うことで、目や耳から知識を得て「力」が付く。解決策を学ぶものではありませんが、参加した通訳者からは、「参加してよかったです。手話通訳者の役割について意識も変わりました。ますます通訳者の仕事の面白さを感じました。」と、意欲を掻き立てる研修会となりました。

手話通訳者と要約筆記者 との合同研修会を開催

8月24日には、近江八幡市総合保健センターを会場に、彩社会福祉事務所代表の坂本彩さんを講師にお迎えし、対人援助の基礎知識を学びました。手話通訳者28名、要約筆記者12名の40名が参加しました。坂本さ

これから遠隔（リレー）通訳の利用はさらに進んでいく中で、聴覚障害者がバリアなく安心して社会参加していく、いろいろな選択肢を持つて社会になることが理想であると思いました。（田邊）

I C F は 医 学 モ デ ル と 社 会 モ デ ル の 統 合 モ デ ル で す 。 そ れ が か か わ り あ つ て 、 私 た ち の 人 生 も 作 ら れ る こ と を 学 び ま し た。



熱心にワークに取り組みました

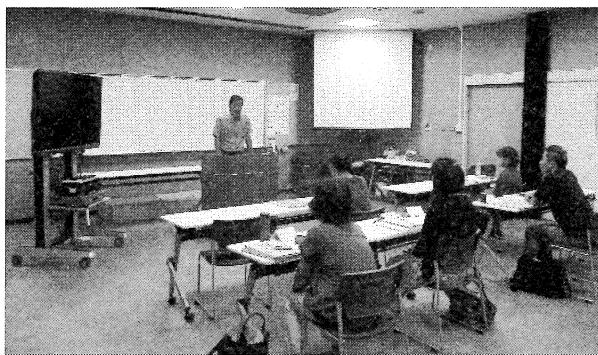
パソコン要約筆記者を目指して！ 養成講座始まる

9月3日(火)、滋賀県要約筆記者養成講座パソコンコースが開講しました。本年度の受講生は7名です。要約筆記者となるために必要な聴覚障害についての知識や、その場の話を要約して伝える技術などを約1年かけて習得します。

開講式ではセンターの木下所長より「この講座は公費で実施されています。社会福祉従事者としての活躍を期待します」との話がありました。受講生も身を引き締めたことと思います。

続いて「聴覚障害の基礎知識」、難聴者講師による最初の講義です。聞こえの仕組みをはじめ、実際どのように聞こえるのか独自の資料を使ってわかりやすく説明がありました。

受講動機はさまざまですが、技術、知識だけでなく、聞こえない人のことを理解することにより、彼らに寄り添った要約筆記者を目指していただきたいです。



開講式の様子

タツノオトシゴ

1年ほど前、癒されたくて京都の亀岡市まで「足もみ」のワークショップを受けに行った。そして期待どおり、楽しく癒されて終わった。そこで実は栗東市に講師がいると知り、何を思ったか、さらに講座を受け、自分だけでなく他の人にも足もみができるように勉強した。けれど、まったく活かされず現在がある。

最近、時々足のある部分をもみたくなる衝動に駆られるようになったと気づいた。調べてみると「胃」である。そういうえば暴食後だ、ということにも気がついた。すごいやん、足の反射区。そして、サボっていたセルフ足もみを少しづつ行なうようになった。今、他に気になる部分がある。「心臓」だ。足もみで何もなく終わるか、はたまた…。

(F・H)

んは、主に知的障害者の支援を中心的に、大津市他で活躍されています。本人（当事者）主体の活動と支援者の役割などパワー・ポイントを活用しての講演でした。

「良い相談とは、困っている人が自分の問題に気づくこと」「相談を受ける人は、しっかりと聞いて、一緒に悩むのか他の専門家につなぐのかを考えること」など、I C F（国際生活機能分類）モデルをふまえ、事例をあげての説明がありました。

ワーク研修では、私たち自身の「やりたいけどできない」阻害要因や障壁をとらえるワークを行いました。私の環境が整っているから。この視点から、障害が原因でできないことの環境をどう整えるかなど、考えを巡らせていました。

「共有情報の活かし方」 パソコン要約筆記者研修会

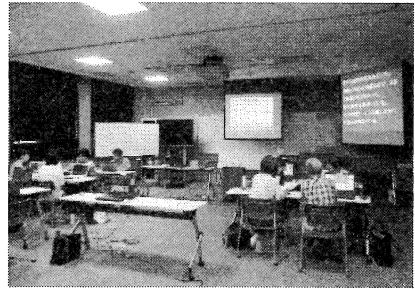
7月28日(日)、聴覚障害者センター研修室にてパソコン要約筆記登録者研修を行いました。参加者は11名でした。

全要研・松井美智子氏を講師にお迎えし、合わせて3時間の講義と実習でした。講義のテーマは、「現場での共有情報の活かし方について」で、共有情報とはどのようなものを指すのか、資料だけではなく、ニュースや天気、その日の会場での話も共有情報であることを再確認しました。

続いての実習では、カラー刷り資料を使用し、どの項目が共有情報として利用できるかを丁寧に検証しました。その後、実際に入力し、検証ポイントを復習しました。また、資料にない発言は入力するなど、落としてはいけない部分の具体的な説明がありました。

また、滋賀では交代合図の色は赤としていますが、講演会など暗い場所では特に観客の目に入りやすいので、赤ではなく優しい色にするなど、現場すぐ実践できるアドバイスをいただきました。

共有情報は要約筆記者が楽をするためではなく、読み手に早く内容を伝えるためのものという考え方を常に意識していこうと改めて学びました。



研修会の様子